

人 格 部 門

人格に関する研究の動向と課題

大 芦 治

(千葉大学教育学部)

はじめに

本稿に課された課題は、2008年7月から2009年6月までにわが国で公刊された研究および2009年10月の本学会総会で発表された研究のうち、人格に関するものを展望することである。公刊された研究は、上記期間中に発行された『教育心理学研究』、『心理学研究』、『*Japanese Psychological Research*』、『カウンセリング研究』、『パーソナリティ研究』、『発達心理学研究』の各誌に掲載されたものを中心に扱った。

公刊・発表された研究を収集するにあたって真っ先に問題となったのは、どの範囲までを人格部門の研究として取り上げるべきかであった。すなわち、人格部門と隣接する社会部門、臨床部門との棲み分けを図りたかったからである。しかし、結局のところいくら検討してもこれらの領域の分類について明確な基準を設けることはできず、筆者の漠然とした心理学観に基づき適宜取捨選択せざるを得なかった。

以下、筆者なりの枠組みを提示しながら諸研究を展望してみたい。

まず、この1年間の研究動向に大きな変化や特徴が見られたかどうか、過去5年間の『教育心理学年報』(第44集~第48集)の同じ人格部門の記事に一通り目を通してこの1年間の研究動向と比較してみた。執筆者によって人格部門の領域の捉え方が異なり一概に比較できるわけではないが、ごく大掴みに述べれば、(i)人格を包括的に説明するいわばグランドセオリーとしての人格研究は一部を除いて少ないこと、(ii)自己愛、自尊感情、自己意識、アイデンティティなど広義の自己に関連した個別の心理学的概念を扱った人格研究が目立つこと、(iii)人格の発達に関する研究は多くはないが、アイデンティティ、養育態度、縦断研究などのキーワードのもとに括れる研究がほぼ一定数報告されていること、(iv)臨床部門との境界領域では抑うつに関する研究が比較的多いこと、などここ数年の人格関連領域の研究動向にはほぼ同じ傾向が見られる。

こうした現状をどのように捉えるかであるが、今回、筆者は Figure 1 のような枠組みのもとに考えてみるこ

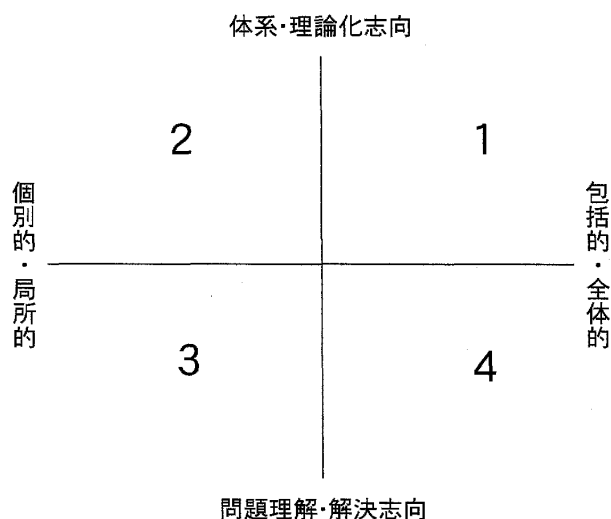


Figure 1 本稿における人格研究理解のための枠組み

ととした。

まず、横軸については、呼称は必ずしも適切とはいえないが「〈包括的・全体的〉対〈個別的・局所的〉」の軸とした。人格研究の多くは人格全体を捉えることを目的とした理論に基づき行われるものと、初めから個別の特性などを取り上げ行われるもののどちらかに大別されるはずである。この軸ではそのようなものを想定している。

一方、縦軸については、こちらもやや語弊があるが「〈体系・理論化志向〉対〈問題理解・解決志向〉」とここでは呼ぶことにする。この軸の意味するところであるが、まず、問題理解・解決志向から述べると、これはその人格概念あるいはモデルがどちらかというナイーブな問題意識に端を発し、その問題の直接的な理解、解決を目指しているということである。一般に、研究者が何らかの人格関連概念を取り上げ研究する契機として個人的な経験や問題意識があることがしばしばあるが、おそらくは、そうした比較的身近な問題意識から提起された概念、モデルなどがこれにあたると思われる。これに対し、体系・理論化志向といわれるものは、扱う概念が個別的あるいは包括的なもののいずれであれ、先行する理論的な枠組みや学術的な定義などがあり、そこから問題が提起され結果的にそうした既存の体系に何らかの示唆を与え

る研究を想定している。

なお、予め注意しておくが、この2軸に基づく分類は当該テーマに基づく研究一まとまりの大まかな位置付けを考えるものであり、研究者個人の当該テーマに対する興味のありよう、個別の研究の方向性などを分類するためのものではない。個人的な体験に根ざしテーマを選択しながらも、実際の研究では一般的な理論の構築を目指す研究者もいれば、包括的な人格理論の研究に携わるものの、元来の関心は個別的な概念にある研究者もいる。そういう意味で個人レベルでのテーマへの関わり合いは多種多様であり、それはここで行おうとしている大まかな分類、理解とは異なるレベルのものである。

以下、Figure 1を念頭に置きながら、各テーマ別に研究の動向を見ていこう。

1. 人格に関する包括的な理論研究

人格の包括的、基本的な理解を目指した研究としては、概ね Figure 1 の第1象限に位置付けられるものがそれにあたる。5因子説に関する研究の流行が一通り終わった現在では、このカテゴリーに属する研究は多くはないが、現在比較的目立っているのは Gray による行動抑制系 (Behavioral Inhibition System, 以下 BIS) と行動賦活系 (Behavioral Activation System, 以下 BAS) の概念をめぐる研究であろう。これは、人格の基礎をなす神経生理学的なシステムとして仮定されたもので、BIS は嫌悪刺激への回避行動を、一方、BAS は快刺激への接近行動をそれぞれ生起させるシステムと考えられており、さらにこれを Eysenck の人格理論と結び付け、前者は神経症傾向との、後者は外向性の次元との関連も指摘されている。

門田・寺崎(2009)は、このモデルに基づき、外向的な人は BAS が活性化しているため日常生活の中で報酬をもたらすような出来事を肯定的に評価し、神経症傾向の高い人は BIS が活発なため罰をもたらすような出来事を否定的に評価するという仮説を立て、その検証を行った。ただ、結果は、外向的な人は肯定的な出来事の中でも対人的な出来事を評価するなど、むしろ、外向性の特性と一致するような状況を体験した場合にのみ肯定的な感情が生起するというものであった。門田・寺崎はこの結果から、出来事の経験によって生ずる感情に関しては、Gray のモデルよりもむしろパーソナリティと環境との相互作用モデルの方が当てはまるのではないかと指摘している。

ところで、BAS が外向性に、BIS が神経症傾向に対応するかについては必ずしも見解が定まったわけではない。高橋・繁樹(2008)は、BIS と BAS に関する尺度を実施し、前者には神経症傾向と正の、外向性と負の相関

を、後者には神経症傾向、外向性の両者と正の相関を見出しており、BIA および BAS と Eysenck の人格理論との関係にまだ検討の余地があることがわかる。また、神経心理学的な基礎を想定している BIS と BAS は、他の性格概念の理論的基礎付けを行う際に取り上げられることもあり、原田・吉澤・吉田(2008)の研究では社会的自己制御との関連が検討されている。

Jung や Kretschmer の類型論はいまや歴史的な事柄に属するが、佐藤(2009)は、Kretschmer の分裂性気質が Jung の内向型と、循環性気質が外向型と、それぞれ関係することを見出している。外向性-内向性の概念は、研究者によってその定義に違いはあるものの前述の Eysenck の理論や 5 因子説の構成要素であり、包括的な人格理論を議論する上で歴史を超えた中核的な概念であることがわかる。

なお、5 因子説に関する研究であるが、この1年間では、村上(2009)が小学生用の尺度の項目を検討したものが目につくくらいで、それ以外の研究(古川・小山, 2009; 水野, 2009; 向山・酒井・西岡・小松・稲森, 2009; 安永・谷・五十嵐・森山・杉本, 2009)では、むしろ、他の特性、行動等の研究を行う上で5因子の測定尺度を用いたという意味合いが強いと思われる。

人格の包括的な理解の中には発達的な側面も含まれる。この領域では、人格の変化を縦断的に検討していく研究が榎本(2009)によって開始された。今回は初年度の調査で得られた結果が発表されたのみであるが、今後の発展が期待される。

全体的、包括的な人格の発達的な側面という意味ではアイデンティティ研究も忘れてはならない。この1年間に発表されたアイデンティティ関連の研究数は必ずしも多くはなかったが、清水(2008)の展望は一瞥すべきものであろう。これまで青年を対象に行われてきたアイデンティティ研究を中年期に軸足を移して行際の基本的な問題が考察されている。清水は青年期のアイデンティティ研究が基本的な枠組みとしてきた Marcia のアイデンティティ・ステータス論に代わる中年期のアイデンティティ・ステータス研究の方法を模索しているが、課題は多いようである。

また、伊田・武久(2009)は複数のアイデンティティの測定尺度の間で本来正相関すべきアイデンティティの達成に寄与する尺度が一部で負相関することを見出している。この結果が理論的な問題を孕んでいるのか単なる測定上の問題なのかは不明だが、今後も検討されるべき課題であるように思われる。

なお、高澤・半澤・武田(2009)も大学生の職業展望とアイデンティティとの関連を検討しており興味深いが、

この研究はむしろ問題理解・解決志向の強いものとして位置付けられるかもしれない。

II. 病理的な人格に関する基礎的な研究

境界性人格障害、統合失調症などといった病理的な概念と関連した人格研究がこのカテゴリーに属する。これらは、人格研究の中では、アメリカ精神医学会の診断基準 (DSM-IV) などで定義されている人格障害や疾病概念を念頭に置いており、そうした意味では体系化志向を持つ。一方で、あくまで個別の人格障害や疾病との関係に局限されているという意味で Figure 1 の中では第 2 象限にほぼ位置付けられる。

そうした研究の中で人格領域の研究としては珍しい実験的な研究が 2 件報告されていることは、注目すべきことであろう。伊藤・岡田 (2008) は、質問紙検査によって測定した統合失調症傾向の強い大学生が、実験課題において左視野に示された手がかり刺激から右視野に示された目標刺激への注意の切替えに困難が生じることを示した。また、佐藤 (2008) は反社会性人格障害傾向の強い大学生は、遅延時間に応じて得られる金額が高まる課題において遅延報酬を急激に割り引く傾向があることを示した。これらの結果は病理的な人格の認知や行動の異常のメカニズムに具体的に切り込んだものとして興味深い。

人格障害の測定を試みた研究としては、田村・井上 (2009) の境界性人格障害に関するもの、下坂 (2009) の回避性人格障害に関するものなどがある。このうち下坂の研究は健常者の回避性人格障害傾向を測定したもののだが、田村・井上の研究は臨床群も対象に検討している。

また、病理的な症状に特有の状態を取り上げ検討したものとして、統合失調症などに見られる妄想 (パノイア) の測定、因子構造の検討を試みた山内・須藤・丹野 (2009) の研究、離人症患者などに見られる感情鈍麻現象を検討した金山・大隅・飯村・余語・大平 (2008) の研究、重度の対人恐怖症患者などに見られる自我漏洩感と同様の感覚が健常者でも体験されることがあるとし、その測定を試みた星野・丹野 (2009) の研究などがある。

こうした研究には、病理的な人格は健常な人格と何らかの形で連続しているという立場をとるものも多い。これに対し大西 (2008) は、病理的な対人恐怖症は罪悪感との関連が強いが、健常者に見られる対人不安は罪悪感との関連は弱いとし、両者の弁別を試みている。

III. 自尊感情に関連した人格研究

個別の人格特性概念の中で、過去数十年を通して最も多く取り上げられてきたのはおそらく自尊感情 (self-esteem) ではなかろうか。これは項目数も少なく信頼性

も高い Rosenberg の自尊感情尺度の利用とセットとなっていた面もある。この 1 年でも、野村 (2009) の高齢者の個人回想法の研究をはじめ後述の自己価値の随伴性に関する研究などで、Rosenberg の尺度は用いられている。

さて、自尊感情に関する研究で近年注目されているのが自己価値の随伴性 (contingency of self-worth) に関する研究である。これは Crocker & Wolfe (2001) が *Psychological Review* に発表した論文によってわが国でも知られることになったものである。これまでのところわが国で発表されている研究は Crocker のモデルを念頭に置いており、そうした意味では、体系化志向の強い個別の人格概念を扱ったものとして Figure 1 の第 2 象限に位置付けられる。

これまで主として Rosenberg の尺度によって測定されてきた自尊感情は単次元で比較的安定したものと考えられてきたが、Crocker らは、実際の行動を予測するような自尊感情は領域に分かれており、どの領域に自分自身の価値を随伴させるかによってそのときどきの自尊感情が決定されてくると考えている。

大谷・中谷 (2009) は、自尊心を決定する個人が価値を置く領域の検討がこれまでほとんど仮想場面に限定されていたことから、実際の学業場面を利用し、自尊感情との関係を検討した。その結果、自己価値が学業に強く置かれる生徒の中でも特性的な自尊感情が低い生徒は失敗などによって状態的な自尊感情を低下させることが、明らかになった。

このように、自尊感情はこれまで考えられていたほど安定したものではなく、外的な出来事によって揺れ動くとされているが、自己価値を置く領域が数多くあるとある領域で自尊感情の揺れを起こすような出来事があっても他の領域が緩衝するために揺れが比較的少なくて済む、という考え方がある。原田 (2008) は、この仮説を大学生によって検討しているが、否定的な自己概念に関わる領域が多い者は、否定的自尊感情の揺れを吸収する傾向があることがわかった。この自尊感情が価値を置いている領域に随伴して揺れ動く状態は、適応的といえるのだろうか。

金子・河村 (2009) は、一部の研究で自尊感情と自己価値の随伴性との間に負の相関が見られた結果に対して、自己形成過程にある青年期では随伴的な自尊感情を維持することが結果的に外的要因に左右されないような自尊感情を形成するので、むしろ正相関が見られることもあるのではないかという仮説を立てた。そして、大学生を対象とした調査で一部実証している。

ところで、Crocker らは、アメリカの大学生では自尊

感情の領域として“競争”，“外見的魅力”，“他者評価”，“学業能力”，“家族からのサポート”，“倫理的であること”，“神の愛”の7つが考えられるとし、それを測定するための尺度を作成している。内田（2008）は、その尺度の日本語版の作成を試みた。その結果、日本でも類似の因子が抽出されたが，“神の愛”，“倫理的であること”などの因子については相違も見られた。

IV. 攻撃性・敵意等に関する研究

攻撃はそれ自体は社会的な行動の一種であるが、攻撃行動の生起には人格的な背景が考えられることから、攻撃性を人格特性として捉え研究する流れは以前より続いている。

Dodge らは攻撃を、敵意や怒りを伴わず何らかの結果の獲得を目的としそのための道具的な手段として行われる能動的攻撃（proactive aggression）と、欲求阻止などによって引き起こされた敵意や怒りに基づき、自己防衛や相手に危害を加えることを目的として起こる反応的攻撃（reactive aggression）の2つに分類している。これに着目した濱口らは、過去数年間にわたりこの2つの攻撃行動のそれぞれを起こしやすい特性を測定することを試み、関連する要因との検討を行ってきた。本年度は、大学生を対象としてこの2つの攻撃性と、怒り、敵意、サイコパシー、言語的攻撃、身体的攻撃などとの関係を検討している（藤原・濱口・西澤・関根・三鈺・桑原, 2009; 濱口・三鈺・桑原・関根・西澤・藤原, 2009; 西澤・濱口・桑原・三鈺・藤原・関根, 2009; 関根・濱口・藤原・西澤・桑原・三鈺, 2009）。

一方、山崎らはDodgeの能動的攻撃のうち、あまり暴力的な面を含まず自分の目的を達成するために悪口を言う、仲間はずれにするなどといった間接的な方法による攻撃を取り上げ、これを関係性攻撃（relational aggression）と呼んだ。また、反応的攻撃を、敵意を抱いた他者に対し怒りを言動として表出する表出性攻撃と、態度に表さない代わりに他者に対し敵意を潜在的に抱く不表出性攻撃に二分した。山崎らは児童や生徒の攻撃性の問題を理解するために攻撃性をこの3つの観点から理解することを提唱し、その測定尺度も作成している。この1年間では、関係性攻撃傾向の強い小学生は他者に対する共感が少ないことを確認したが（勝間・山崎, 2008b）、一方で、児童の関係性攻撃に関する質問紙調査を自己評定と仲間評価でそれぞれ実施した場合、双方の評定値の相関があまり高く得られず、測定方法上の問題も残されていることが明らかになっている（勝間・山崎, 2008a）。

また、攻撃性の発達に影響する養育態度に関する研究も行われている。関口・濱口（2009）は小学生を対象とした研究で関係性攻撃と顕在性攻撃（上記の表出性攻撃に近い

概念）の両者が母親の不適切な養育態度と関係していることを見出しているが、桑原・濱口（2009）が幼児を対象として養育態度が社会的情報処理を介して関係性攻撃と顕在性攻撃に与える影響を調べた研究では、養育態度は特に関係していなかった。

これら一連の研究は、いじめ等の児童・生徒の不適応の問題に切り込む要素も持ち合わせているが、研究の指向性としてはDodgeらの理論を枠組みとして維持し続けている点で、体系・理論化志向の強いもののように思われる。そうした意味ではわが国で現在行われている攻撃性関連の研究は、Figure 1の第2象限に位置付けられよう。

V. 抑うつに関する研究

抑うつに関する研究は相変わらず多い。抑うつは臨床心理学的な課題とも考えられるが、人格研究としての側面も有しており、ここでも取り上げないわけにはいかないだろう。

まず、抑うつ研究の中でも比較的理論化志向の強い研究から見てみよう。今日、抑うつが生起、維持にある種の認知が関係していることは周知のこととなっている。近年ではそうした認知に関する研究の中でも、抑うつ者が抑うつ的な気分が生じたときにその原因や将来起こりうるべき結果などについて考え続ける抑うつ反すう（depressive rumination. または、ネガティブな反すう negative rumination）に関する研究が散見される。

岡村（2009）は、大学生を対象とした研究で、抑うつ的な反すうの増強要因として完全主義の中のミスへの囚われの強さと不合理な信念があることを確認した。抑うつ的な反すうと信念あるいは完全主義との関係を指摘する研究は他にも報告されている。長谷川・金築・根建（2009）は、抑うつ者は反すうしないことで不利益が生ずるという強い信念を持っていることを取り上げ、そうした信念を測定するための尺度を開発し大学生を対象として検討した。また、完全主義との関係では、齋藤・沢崎・今野（2008）は不適応的完全主義がネガティブな反すうを経て抑うつを招き、さらにはそれが攻撃性へつながるモデルを実証している。さらに、服部・唐沢（2009）は、正誤のフィードバックが明らかな課題と思考抑制課題を同時に実施された際、完全主義的な傾向の強い抑うつ者は正誤の明らかな課題に囚われているために、そちらに認知的な資源が向いてしまうことを実験的に検討している。このことは、抑うつ者が抑うつ的な反すうを抑制できないこととも関係があると思われる。こうした研究は理論的な志向の強いものではあるが、いわゆる5因子説、あるいは前述のBISとBASなどといった生理学

的な背景を求める研究とは異なる認知的な方向に向かっているところにこの領域の研究の特徴があるように思われる。

これよりやや臨床的な抑うつ認知的プロセスを扱った研究としては、悲観的な帰属スタイルの修正を認知行動療法によって試みた沢宮・田上 (2008) の研究や、抑うつ的なスキーマの改変よりもむしろその受容が抑うつの治療にとって有効ではないかと指摘した黒田・菊川 (2009) の研究などがある。

抑うつに関しては発達的な研究も報告されている。この1年間についていえば、両親の夫婦間葛藤が子どもの抑うつに与える影響を検討した研究が2件 (井上・氏家・二宮・五十嵐・山本, 2009 ; 川島・眞榮城・菅原・酒井・伊藤, 2008) 報告されていることが目につく。ともに思春期、青年期の子どもとその両親を対象としたもので、結果には微妙な相違はあるものの、両親の夫婦間葛藤が子どもの抑うつの発達に与える影響を見出している点では大筋一致している。また、森山・杉本・安永・谷・五十嵐 (2009) は短期大学入学後およそ半年以上にわたって抑うつ傾向の高かった女子学生の愛着回避傾向が強いことを報告しており、抑うつの発達の要因に両親の影響を求める研究はまだしばらくは続けられそうである。

こうした研究とは別に、地味ではあるが、抑うつの測定法の検討も続けられている。中学生の抑うつを教師が測定する尺度を開発した藤生 (2009) や、大学生用の項目を新たに作成し項目反応理論を用いて検討した渡辺・平井 (2009) の研究などがこの1年間に報告された。

なお、人格部門の範疇からはややはずれるかもしれないが、抑うつ研究にとって特に重要度が高いのは治療、予防などの臨床的な介入研究であろう。角・高橋・山口・丹野・石垣・佐々木・嶋田 (2009)、佐藤・今城・戸ヶ崎・石川・佐藤・佐藤 (2009) がそれぞれ生徒や児童を対象としたプログラムの有効性を検討している。

このように抑うつに関するものはこの1年間だけでも相当数が報告されており、それぞれの研究の目指す方向にもかなり幅があるように思う。総じて見れば、抑うつの認知的なプロセスあるいは発達に関する研究などは理論化志向の強いもので Figure 1 の第2象限に属する一方、臨床的な色彩の強い研究が第3象限にまたがるというのが現状ではないだろうか。

VI. 完全主義に関する研究

抑うつの生起・維持要因と考えられている抑うつ的反すうと完全主義との関係が深いことは既に紹介したが、この1年間では抑うつ研究の文脈に限定せず完全主義を扱った研究が何件か報告されている。例えば、宮原

(2009) は、海外の研究で完全主義には不適応的な側面としての MEC (Maladaptive Evaluative Concerns) と適応的な側面としての PC (Positive Concerns) の2側面があり、不安や抑うつなどと関係が深いのは MEC であるという指摘があることを取り上げ、わが国の大学生を対象にこれを確認している。

また、完全主義を、自己志向の完全主義、他者志向の完全主義、社会規定的完全主義に三分し、このうち自己志向の完全主義のみを特にパーソナリティの適応と関連するものとして取り上げることも多い。この自己志向の完全主義を測定する尺度としては桜井・大谷 (1997) によって作成された日本語版完全主義者尺度が知られているが、この尺度の4つの下位尺度「完全でありたいという欲求」、「自分に高い目標を課する傾向」、「ミス (失敗) を過度に気にする傾向」、「自分の行動に漠然として疑いをもつ傾向」のうち、3番目の「ミス (失敗) を過度に気にする傾向」が劣等感を強める要因となっていることが高坂 (2008) によって確認されている。また、齋藤・今野 (2009) は、日本語版完全主義尺度の下位尺度のうち「ミス (失敗) を過度に気にする傾向」は羞恥心、妬みと、「自分の行動に漠然として疑いをもつ傾向」は罪悪感と関係していることを確認している。

一方、この自己志向の完全主義の形成要因を探る研究もある。これらの研究では養育態度、愛着スタイルなど、主として親との関係が検討されることが多いが、本年度もこの流れを汲む福井 (2009) の研究が発表されている。この研究では、完全主義尺度の下位尺度と愛着スタイルの測定尺度の点数を用いクラスター分析によって対象者を分類し、それぞれのクラスターに属する対象者の心理的健康を比較するという方法をとっている。結果は必ずしも明確ではないが、心理的健康の低い対象者は愛着型が不適応的で「ミス (失敗) を過度に気にする傾向」が強いことなど、愛着が不適応的な完全主義の形成に関与している可能性が示唆されている。

完全主義に関する研究はわが国では比較的最近になって目立つようになってきたもので、現時点では理論的な関心の強い研究が目立つことなどから Figure 1 の第2象限に属すると考えられるが、今後、抑うつ研究の影響を受けながら問題解決志向の強い第3象限にシフトしていく可能性もあるのではないと思う。

VII. 自己に関連した研究

自己をキーワードにしたパーソナリティ研究の中では、Rogers の自己理論をベースにした研究が長く定番となっている。この1年間でも、理想自己ー現実自己のギャップが大きいにもかかわらずあまり自己受容が低く

ならないケースが存在する要因としてシャイネスを想定し検討した研究(牧・坂井, 2009)や、小中学生を対象として自己肯定感や自己実現が学校での適応感や生活習慣とどのように関係しているかを探った研究(栗谷・本間, 2009)などが報告されている。

こうした典型的な自己研究とは若干趣を異にするが、ここ数年間精力的に研究が続けられている仮想的有能感に関する研究も、現代の若者の自己のあり方を扱っている点では広義の自己研究に含められるのではないかと思う。

仮想的有能感とは速水敏彦によって提起されたもので、現代の若者に特徴的な他者を軽視することによって自己の有能さを感じる傾向を指すが、この1年間でも、仮想的有能感の強い高校生は学業に関するコミュニケーションにおいて他者との間で回避的、防衛的な態度を示すことが多いという結果(小平・青木・松岡・速水, 2008)が報告されている。また、木野・速水(2009)は、仮想的有能感の形成要因として個人主義傾向の強まりを仮定した上で、日本、韓国、シンガポール、アメリカ、カナダの5カ国の対象者の個人主義傾向と仮想的有能感との関連を検討したが、必ずしも個人主義傾向が強い国の対象者の仮想的有能感が高いこともなく、さらなる検討の余地が残った。

仮想的有能感の研究はいわゆる臨床的、実践的な介入を目指したものではないように思われるが、問題意識が現代の若者の心理的側面を理解することから始まっており、そうした意味ではFigure 1の第3象限に属するものと考えられるのではないかと思う。

ところで、他者よりも自己を重視するという意味では、自己憐憫という特性も仮想的有能感とある種の共通性を持つであろう。自己憐憫とは不遇な状況にある自己に対して抱く、哀れみの感情、認知と定義されるが、これに関する研究はわが国ではほとんど手がつけていなかった。そこに注目した林田・佐藤(2009)は、自己憐憫の抱きやすさを測定するための尺度を開発し、信頼性、妥当性を検討している。今後の研究が理論的、体系的な方向に向かうか、実践的な方向に向かうかは現時点では不明だが、続報を待ちたい。

VIII. 人格と感情に関する研究

このカテゴリーに属する研究はそれほど多くはない。問題理解的な志向性を持った研究としては、江口・小倉・野田・谷中・平石・川島(2009)が情緒的コンピテンスの高さと被援助志向性との関係を、中高校生を対象に検討したものがある。中学生と高校生とでは被援助志向性に関する情緒的コンピテンスの側面が異なること

が明らかにされている。

他に感情と人格との関係を扱った研究の中でどちらかという体系・理論化志向の強いものとして、以下の2つがある。一つは、Ishimura & Kodama (2009)によるCsikszentmihalyiのフロー理論でいう自己目的的人格(autotelic personality)に関する研究で、自己目的的人格の者がフロー体験を多くしていること、時間管理や目標設定が適切であることなどを確認している。一方、Takemura (2009)は感情を伴ったヒューリスティックな思考が心的に飽和することで困難になることを認知的メタボリック・シンドローム(cognitive metabolic syndrome)と呼び、これに対し精神分析の枠組みを援用しながら、モデル化を図っている。このTakemuraのモデルはいまのところ実証が試みられてはいないが、今後の研究が期待される。

広い意味での感情に関連した人格研究という意味では共感性の研究も挙げられるであろう。共感性がどのように考えられるかは、他者の感情を代理的に経験する能力と見る感情的な立場と、他者の心理状態を正確に理解する能力と考える認知的な立場に二分できようである。この点に着目した鈴木・木野(2008)は、この2つの立場それぞれから共感性を測定する尺度を開発し、信頼性、妥当性を検討している。共感性の研究は決して目新しいものではないが、今後も多くの研究者が関心を持つテーマであり続けるだろう。

IX. その他

上記の共感性とも関連して「養護性(nurturance)」という概念がある。「養護性」とは相手の健全な発達を促進するための共感性と技能とされている。養護性はもともと親が子どもを育てるために必要な心理的特性に由来するが、これを子育てをする親に限定せず広く一般的に有する特性として捉えようというものである。糊澤・福本・岩立(2009)は、大学生を対象として過去に養護されたもしくは養護した経験が養護性の発達に与える影響を検討している。

他に大学生を対象とし個別の特性を検討した研究としては、杉崎(2009)によるレジリエンスの研究なども挙げられよう。レジリエンスとはストレスなどを体験した場合の精神的回復力と定義されるが、杉崎は教員に必要な資質としてレジリエンスを取り上げ、教職課程履修者の教員志望の強さとレジリエンスとの関係を検討している。

“許し”の研究というものがある。加藤・谷口(2009)は、許し尺度を開発しその信頼性・妥当性を検討している。“許し”とは「自身の感情を害することを知覚し、

それに向けられた否定的な感情、認知、動機づけあるいは行動が、中性あるいは肯定的に変化する個体内のプロセス」と定義されているが、ここではそうした変化のプロセスの生起のしやすさを個人差として測定することを試みていることから、一種の人格研究と考えてよいであろう。

こうした研究は何らかの意味で局所的・個別的で問題理解・解決的な志向を持ったものといえる。これとは異なり、明確な問題理解・解決志向を持ちながら、一方で、包括的・全体的なモデルを構築しようとしているのが黒川 (2009) のキャリア適応力に関する研究である。キャリア適応力とは職業に関する環境の変化や困難さに対して容易に適応できる資質を指すが、その構成要素として挙げられているものとしては、感受性、ストレス耐性、積極性などといった人格変数の他、理解力、問題分析力、計画・組織力といった広義の意味での能力、適性に関する変数などがある。黒川の研究は、こうした視点から個人を包括的、全体的に捉えようとしている点に特徴がある。このような研究は、教育心理学に関連した人格研究ではその重要性にもかかわらず、あまり見かけることがないようにも思える。

結びにかえて

以上、この1年間にわが国で発表された人格関連の研究を概観してみた。いうまでもないことだが、現在、人格関連の研究が発表される媒体は極めて多様化しており、本稿で検討対象とした研究も発表された研究を完全に網羅しているわけではない。したがって、ここで何らかの結論を急ぐことは難しいことは十分承知しているが、筆者なりの枠組みで研究を整理してみた限り、近年の人格関連の研究はおおよそ次のような傾向があるのではないかと思う。

すなわち、(i)人格に関する研究の多くは、人格を包括的・全体的に捉えるよりも、人格のいくつかの個別的・局所的な側面を取り上げることに對する関心が強い。(ii)人格研究の個別的・局所的な側面を理論化志向の強い研究と問題理解・問題解決志向の強い研究に分けると、やや前者が多く、後者については前者の延長線上で行われている研究なども目につく。

この現状をどのように考えるかであるが、個々の研究の水準という点では特段の注文をつけるところはないものの、総じて見ればもう少し冒険した研究が増えてもよいように思えた。ある意味、人格研究は心理学のすべての領域に通じるものであり、この領域に取り組む醍醐味は人格を包括的、全体的に把握できたときにあるのではないだろうか。また、心理学を実生活に密着した問題の

理解、解決に役立てるに際し、人格概念をその道具として利用できれば、それもまた魅力的であろう。特に、近年、実践学としての側面が強調される機会が多くなってきている教育心理学についていえば、後者の重要性はますます増しているように感じられる。

しかしながら、現状ではこのいずれの方向性を持った研究も、人格研究の大きな部分を占めているわけではない。また、今後、どちらの路線をとるにせよ、その実行には些かなりとも困難が伴う。ただ、その困難にどれだけ立ち向かおうとするかが、短期的な成果はともかく、長期的な視野に立った人格領域の研究の発展に寄与するのではないだろうか。

筆者なりの個人的な願望を申し述べ、本稿を締め括りたい。

引用文献

- 栗谷初子・本間友巳 (2009). 思春期の自己肯定感のあり方に影響を及ぼす要因について 教心 51, 287.
- Crocker, J., & Wolfe, C. T. (2001). Contingencies of self-worth. *Psychological Review*, 108, 593-623.
- 江口佳織・小倉正義・野田有美・谷中裕香・平石賢二・川島一晃 (2009). 中学生・高校生の情緒的コンピテンシスと被援助志向性との関連 教心 51, 294.
- 榎本博明 (2009). 青年期から成人期のパーソナリティの発達的变化 教心 51, 30.
- 藤生英行 (2009). 中学生用うつ教師評定尺度の作成 教心 51, 187.
- 藤原健志・濱口佳和・西澤千枝美・関根千恵・三鈷康代・桑原千明 (2009). 大学生の能動的・反応的攻撃性と心理社会的不適応との関連Ⅳ—能動的・反応的攻撃性類型の心理行動特性の検討— 教心 51, 450.
- 福井義一 (2009). 高目標設置は本当に適応的か? —成人愛着スタイルを調整変数として— 心理学研究, 79, 522-529.
- 古川春菜・小山秀之 (2009). 大学生男女における性格と食行動の関連 教心 51, 541.
- 濱口佳和・三鈷康代・桑原千明・関根千恵・西澤千枝美・藤原健志 (2009). 大学生の能動的・反応的攻撃性と心理社会的不適応との関連Ⅰ—大学生用能動的・反応的攻撃性尺度の因子構造の検討— 教心 51, 447.
- 原田宗忠 (2008). 青年期における自尊感情の揺れと自己概念との関係 教育心理学研究, 56, 330-340.
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 (2008). 社会的自己制御 (Social Self-Regulation) 尺度の作成—妥当性の検討および行動抑制/行動接近システム・実行注意制御との関連— パーソナリティ研究, 17, 82-94.

- 長谷川晃・金築 優・根建金男 (2009). 抑うつ的反すうに関するポジティブな信念の確信度と抑うつ反すう傾向との関連性 パーソナリティ研究, **18**, 21-34.
- 服部陽介・唐沢 穰 (2009). 抑うつ者に見られる思考抑制時の認知資源の不均等な配分 パーソナリティ研究, **17**, 220-222.
- 林田太郎・佐藤 純 (2009). 青年期における自己憐憫の構造—自己憐憫尺度作成の試み— パーソナリティ研究, **18**, 1-11.
- 星野貴俊・丹野義彦 (2009). 自我漏洩感の体験率における個人差を説明するパーソナリティ要因の検討 パーソナリティ研究, **17**, 226-228.
- 伊田勝憲・武久麻衣 (2009). 自我同一性の尺度間の関係から見える問題—同一性地位判定尺度, 日本語版 EPSI, MEIS をめぐって— 教心 **51**, 614.
- 井上裕光・氏家達夫・二宮克美・五十嵐 敦・山本ちか (2009). 中学生の社会的行動についての研究(65)—夫婦関係が子の抑うつに影響するモデル— 教心 **51**, 623.
- Ishimura, K., & Kodama, M. (2009). Flow experiences in everyday activities of Japanese college students: Autotelic people and time management. *Japanese Psychological Research*, **51**, 47-54.
- 伊藤慎也・岡田 斉 (2008). 統合失調型における注意抑制の非対称性 パーソナリティ研究, **17**, 108-110.
- 門田昌子・寺崎正治 (2009). パーソナリティ, 日常的出来事と主観的幸福感との関連 パーソナリティ研究, **18**, 35-45.
- 金山範明・大隅尚広・飯村里沙・余語真夫・大平英樹 (2008). 感情鈍磨現象の2様態—離人症状とサイコパシーにおける感情鈍磨現象の検討— パーソナリティ研究, **17**, 104-107.
- 金子功一・河村茂雄 (2009). 青年期における随伴性自尊感情の研究—自尊心, 対人ストレス, コーピングとの関連性— 教心 **51**, 446.
- 加藤 司・谷口弘一 (2009). 許し尺度の作成の試み 教育心理学研究, **57**, 158-167.
- 勝間理沙・山崎勝之 (2008a). 児童の関係性攻撃における自己評定と仲間評定の比較 心理学研究, **79**, 263-268.
- 勝間理沙・山崎勝之 (2008b). 児童における3タイプの攻撃性が共感におよぼす影響 心理学研究, **79**, 325-332.
- 川島亜紀子・眞榮城和美・菅原ますみ・酒井 厚・伊藤教子 (2008). 両親の夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連 教育心理学研究, **56**, 353-364.
- 木野和代・速水敏彦 (2009). 仮想的有能感の形成と文化的要因—大学生を対象に— 教心 **51**, 26.
- 小平英志・青木直子・松岡弥玲・速水敏彦 (2008). 高校生における仮想的有能感と学業に関するコミュニケーション 心理学研究, **79**, 257-262.
- 高坂康雅 (2008). 青年期における劣等感と自己志向の完全主義との関連 パーソナリティ研究, **17**, 101-103.
- 黒田祐二・菊川真衣 (2009). 抑うつスキーマを受容することにより抑うつは低くなるか?—抑うつスキーマを修正することが全てではない— 教心 **51**, 600.
- 黒川雅之 (2009). キャリア適応力と職業・個人的スキルとの関係 カウンセリング研究, **42**, 134-144.
- 糊澤令子・福本 俊・岩立志津夫 (2009). 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性 (nurturance) へ及ぼす影響 教育心理学研究, **57**, 168-179.
- 桑原千明・濱口佳和 (2009). 親の養育行動と子どもの攻撃行動との関連の検討(2)—関係性葛藤場面における社会的情報処理を媒介として— 教心 **51**, 526.
- 牧 郁子・坂井円香 (2009). 大学生における理想自己—現実自己のギャップの認知が自己受容・対人不安に与える影響— 教心 **51**, 84.
- 宮原千佳 (2009). 完全主義の2面性に関する研究 教心 **51**, 701.
- 水野正憲 (2009). 交流分析の自我状態と Big Five 尺度との関係 教心 **51**, 219.
- 森山雅子・杉本英晴・安永和央・谷 伊織・五十嵐素子 (2009). 短期大学生の心理的発達に関する縦断調査(1)—抑うつの変動に関する分析— 教心 **51**, 330.
- 向山康代・酒井恵子・西岡美和・小松孝至・稲森涼子 (2009). 自叙写真にもとづくパーソナリティの推測—擬態語と5因子特性語による評定と自由記述の分析— 教心 **51**, 540.
- 村上宣寛 (2009). 小学生用主要5因子性格検査 (Little Big Five 2) の項目構成 教心 **51**, 29.
- 西澤千枝美・濱口佳和・桑原千明・三鉢康代・藤原健志・関根千恵 (2009). 大学生の能動的・反応的攻撃性と心理社会的不適応との関連II—大学生用能動的・反応的攻撃性尺度の信頼性と妥当性の検討— 教心 **51**, 448.
- 野村信威 (2009). 地域在住高齢者に対する個人回想法の自尊感情への効果の検討 心理学研究, **80**, 42-47.
- 大西将史 (2008). 青年期における対人恐怖的心性と対人不安の差異—罪悪感による両概念の弁別— 心理学研究, **79**, 351-358.

- 大谷和大・中谷素之 (2009). 自己価値の随伴性と学業達成のプロセス 教心 **51**, 539.
- 岡村寿代 (2009). ネガティブな反すうの増減要因に関する検討 教心 **51**, 25.
- 齋藤路子・今野裕之 (2009). ネガティブな反すうと自己意識的感情および自己志向の完全主義との関連の検討 パーソナリティ研究, **18**, 64-66.
- 齋藤路子・沢崎達夫・今野裕之 (2008). 自己志向の完全主義と攻撃性および自己への攻撃性の関連の検討—抑うつ, ネガティブな反すうを媒介として— パーソナリティ研究, **17**, 60-71.
- 桜井茂男・大谷佳子 (1997). “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, **68**, 179-186.
- 佐藤 徳 (2008). 反社会性人格障害傾向者における遅延ならびに確率による報酬の価値割引 パーソナリティ研究, **17**, 50-59.
- 佐藤 寛・今城知子・戸ヶ崎泰子・石川信一・佐藤容子・佐藤正二 (2009). 児童の抑うつ症状に対する学級規模の認知行動療法プログラムの有効性 教育心理学研究, **57**, 111-123.
- 佐藤淳一 (2009). Kretschmer の気質タイプと Jung の心理学的タイプ—向性概念をめぐって— パーソナリティ研究, **17**, 223-225.
- 沢宮容子・田上不二夫 (2008). 認知行動療法による悲観的帰属様式の変容 カウンセリング研究, **41**, 346-355.
- 関口雄一・濱口佳和 (2009). 児童の認知した両親の養育態度および家族機能と児童の攻撃性の関係 教心 **51**, 108.
- 関根千恵・濱口佳和・藤原健志・西澤千枝美・桑原千明・三鈷康代 (2009). 大学生の能動的・反応的攻撃性と心理社会的不適応との関連Ⅲ—能動的・反応的攻撃性と攻撃的行動傾向との関連の検討— 教心 **51**, 449.
- 清水紀子 (2008). 中年期のアイデンティティ発達研究—アイデンティティ・ステータス研究の限界と今後の展望— 発達心理学研究, **19**, 305-315.
- 下坂 剛 (2009). 大学生における回避性人格傾向の研究—尺度作成と信頼性および妥当性の検討— カウンセリング研究, **42**, 109-117.
- 杉崎雅子 (2009). 教職課程を履修する大学生のレジリエンス 教心 **51**, 224.
- 角 沙織・高橋 史・山口真実・丹野 恵・石垣久美子・佐々木和義・嶋田洋徳 (2009). 中学生を対象とした抑うつ低減プログラムの実践 教心 **51**, 185.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて— 教育心理学研究, **56**, 487-497.
- 高橋雄介・繁樹算男 (2008). 罰の回避と報酬への接近の感受性を測定する 3 尺度の比較 パーソナリティ研究, **17**, 72-81.
- 高澤健司・半澤礼之・武田美亜 (2009). 大学生における職業展望浮沈曲線とアイデンティティの関連 教心 **51**, 212.
- Takemura, A. (2009). Conceptualization of “Cognitive Metabolic Syndrome” on personality. 教心 **51**, 24.
- 田村和子・井上果子 (2009). 境界性人格障害の特異性について 心理学研究, **79**, 506-513.
- 内田由紀子 (2008). 日本における自己価値の随伴性—日本版自己価値随伴性尺度を用いた検証— 心理学研究, **79**, 250-256.
- 渡辺利夫・平井輝幸 (2009). 項目反応理論を用いた日常的抑うつ感の尺度構成 教心 **51**, 173.
- 山内貴史・須藤杏寿・丹野義彦 (2009). 日本語版パラノイア・チェックリストの因子構造および妥当性の検討 パーソナリティ研究, **17**, 182-193.
- 安永和央・谷 伊織・五十嵐素子・森山雅子・杉本秀晴 (2009). 女子短期大学生の心理的発達に関する縦断調査(3)—性格特性と抑うつおよび学業成績の関連— 教心 **51**, 332.